

NEW JAPAN
P HILHARMONIC
SUMIDA, TOKYO

新日本フィルハーモニー交響楽団
2024/2025シーズン

10 11

October, 2024

November, 2024



2024/2025 シーズン

新日本フィルハーモニー交響楽団 10, 11月演奏会

Contents

すみだクラシックへの扉 #26 小室敬幸	1
トリフォニーホール・シリーズ/サントリーホール・シリーズ #659 相場ひろ	7
すみだクラシックへの扉 #27 石川亮子	13
楽員ストーリーズ ④ 高橋正人 (ヴィオラ)	19
NJP from Inside	20
2024 / 2025シーズン 定期演奏会プログラム	22
NJP 1月、2月公演 柴田克彦の鑑賞ポイント	23
お客様からの声	25
室内楽シリーズ	27
「小澤征爾追悼演奏会」レポート 寺西基之	28
「パトロナージュ・システム」のご案内	34

■特別支援企業

オリックス

in 鹿島

CCC

大和証券

東京東信用金庫

NOMURA

フジサンケイグループ

三井住友銀行

■特別支援団体

公益財団法人 オリックス宮内財団

特別支援企業/団体は、新日本フィルの運営を支援しています。



10.25 [金] 26 [土]

すみだクラシックへの扉

新日本フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会 すみだクラシックへの扉 第26回
2024年10月25日(金)14時00分 すみだトリフォニーホール
10月26日(土)14時00分 すみだトリフォニーホール

●モーツァルト (1756-91)

Wolfgang Amadeus Mozart

交響曲第39番 変ホ長調 K. 543

Symphony No. 39 in E-flat major, K. 543

約30分

- I. Adagio - Allegro
- II. Andante con moto
- III. Menuetto: Allegretto
- IV. Finale: Allegro

交響曲第40番 ト短調 K. 550

Symphony No. 40 in G minor, K. 550

約30分

- I. Molto allegro
- II. Andante
- III. Menuetto: Allegretto
- IV. Allegro assai

—— 休憩20分 ——

交響曲第41番 八長調 K. 551 「ジュピター」

Symphony No. 41 in C major, K. 551 "Jupiter"

約30分

- I. Allegro vivace
- II. Andante cantabile
- III. Menuetto: Allegretto
- IV. Molto allegro

[指揮] 上岡敏之

Toshiyuki Kamioka, Conductor

[コンサートマスター] 崔(チェ)文洙 / 伝田正秀

Munsu Choi and Masahide Denda, Concertmaster

[アシスタント・コンサートマスター] 立上 舞

Mai Tategami, Assistant Concertmaster

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

■共催：すみだトリフォニーホール

■特別協賛：オリックス株式会社 / 公益財団法人オリックス宮内財団

■助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))

独立行政法人 日本芸術文化振興会

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

〈コンサートの感想をお寄せください〉

演奏会終了後1週間以内にご回答いただいた方の中から、抽選で10名様に新日本フィルよりグッズをプレゼント!

QRコードを読み込み、WEBにてお答えください。
プレゼントの当選者にはメールにてご連絡させていただきます。



@njp.or.jpからのメールが受信できるようご設定をお願いいたします。

<https://forms.gle/pgWSTF1gooyVLG9t8>

いただいたお声は次号以降の定期演奏会プログラムでご紹介させていただく可能性がございます。ご了承ください。

演奏会アンケートは
こちらから

<https://forms.gle/pgWSTF1gooyVLG9t8>



オリックス株式会社

公益財団法人 オリックス宮内財団



オリックス



©武藤章

上岡敏之 [指揮] Toshiyuki Kamioka, Conductor

東京生まれ。東京藝術大学でマルティン・メルツァーに指揮を師事し、作曲、ピアノ、ヴァイオリンも並行して学ぶ。1982年、名誉ある安宅賞を受賞。後にロータリー国際奨学生として、ハンブルク音楽大学に留学、クラウスペーター・ザイベルに指揮を師事。キール市立劇場ソロ・コレペティートル及びカペルマイスターとして歌劇場でのキャリアをスタートさせた。これまでに、ヘッセン州立歌劇場音楽総監督、北西ドイツ・フィルハーモニー管弦楽団首席指揮者などを歴任。2004年からヴッパータール市立歌劇場音楽総監督に就任。その後、ザールラント州立歌劇場音楽総監督、ヴッパータール響首席指揮者、ヴッパータール市立歌劇場インテンダントの要職を務めた。ヴッパータール響とは二度の日本ツアーを行い、絶賛を博した。2016/17シーズンよりコペンハーゲン・フィル首席指揮者に就任。ケルン放送交響楽団、バンベルク交響楽団、バイエルン放送交響楽団、シュトゥットガルト放送交響楽団などに客演する。

日本では、これまでに、読売日本交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、九州交響楽団などに客演し、2016年シーズンから5年間にわたり新日本フィルハーモニー交響楽団音楽監督を務めた。欧州を中心に活躍し、オペラ、コンサートの両面において、高い音楽性、きめ細かい解釈、そしてオーケストラの個性を引き出す力が、国際的に高く評価されている。2002年ホテルオークラ音楽賞、2007年第15回渡邊暁雄音楽基金音楽賞、2014年第13回齋藤秀雄メモリアル基金賞を受賞。ヴッパータール響とのコンビでは、コロムビアとオクタヴィアより8枚のCDをリリースし、いずれも高い評価を得る。新日本フィル音楽監督在任中はライブ録音も継続的にリリースし、好評を博す。現在、コペンハーゲン・フィル名誉指揮者、ザールブリュッケン音楽大学指揮科正教授。

アントニオ・サリエリ(1750~1825)とヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756~91)を主人公にした映画「アマデウス」(1985年日本公開)は、アカデミー賞で作品賞や監督賞をはじめとする8部門を受賞した不朽の名作である。だがクラシック音楽に明るくない人ほど描かれた内容を史実と誤認してしまうことが、多いという功罪もあった。その最大の被害者はサリエリに違いない。ベートーヴェンやシューベルトを含む、数多くの弟子を無償で指導したり、時にはアイスクリームを奢ったりと、実際のサリエリは面倒見の良い人格者だったのだから。サリエリがモーツァルトを毒殺したという噂も、モーツァルトの死後およそ30年後に広まったものだという。

サリエリとモーツァルトの不仲説を支えてきた根拠のひとつとなったのが、モーツァルトが父に送った手紙だ。自分の作品が演奏されないのはサリエリが妨害しているのだと主張しているのだが、実は何の根拠もない憶測に過ぎなかった——つまり逆恨みなのである。ところがモーツァルトは1791年9月30日、「魔笛」の上演にサリエリを招待。(ドイツ語のオペラに否定的だった)サリエリが絶賛してくれたと妻宛の手紙に残されている。遺恨を晴らした公演から約9週間後、モーツァルトはこの世を去った……。



晩年のモーツァルトをめぐって

モーツァルトをめぐる誤解といえば、晩年は作品が十分に理解されぬようになり、借金を重ねるほど困窮して亡くなったという「悲劇の天才」像もそのひとつ。高額な借金があったのは事実だが、実際のところはそれなりに稼ぎが多かった。ただし1788年2月にオスマン帝国との塙土戦争(1791年8月4日終結)がはじまったことによってオーストリアでは増税とインフレ(物価高騰)が起きたにも関わらず、モーツァルト一家は生活水準を下げられなかったために生活が苦しくなったのだ。この時期にモーツァルトが主催した演奏会に人が集まらなかったというのも、戦争の影響なしには考えられないのである。

1788年、2ヵ月以内に作曲された三大交響曲

塙土戦争がはじまった1788年、夏に書かれたのがモーツァルトの「三大交響曲」と呼ばれてきた交響曲第39~41番であった。作曲の目的は定かではないが、演奏会(イギリスでの演奏旅行?)および出版によって収益を上げようとしたのだと推測されている。親交のあったフランツ・ヨーゼフ・ハイドン(1732~1809)が1785~86年に作曲した第84番 変ハ長調、第83番短調「めんどり」、第82番ハ長調「熊」を意識したと考えられているが、同時に彼の弟ミハエル・ハイドン(1737~1806)が1784年に作曲

した第27番 変ロ長調、第29番 二短調、第28番 ハ長調からの影響が散見されるのも興味深い。

■ モーツァルト：交響曲第39番 変ホ長調 K. 543

第1楽章 序奏付きのソナタ形式。堂々たる序奏は、特徴的な付点の跳ねるリズムが音楽をゆっくりと前に進めていく。その過程に登場する“なめらかな下行音階”と“上行する分散和音”が、テンポが速い3拍子となる提示部の第1主題をほのめかしているのが面白い。展開部では第1主題と第2主題のあいだに登場する軽快な反復フレーズが活躍する。

第2楽章 3つの主題によって構成されているロンド風の緩徐楽章。この楽章の第1主題も付点のリズムが支配的だが、受ける印象は大きく異なる。第1主題と第1主題のあいだには、突如として悲しみに襲われる第2主題と、管楽器が折り重なってゆく優しげな第3主題が挟み込まれる。

第3楽章 三部形式によるメヌエット。威勢のよい主部と、少し落ち着いた中間部(トリオ)が対比される。

第4楽章 ソナタ形式。だが、いわゆる第2主題はなく、冒頭から何度となく繰り返される第1主題が転調しながら全体で繰り返されていく。フィナーレに相応しく最後まで駆け抜けていく。

[楽器編成]フルート、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部。

■ モーツァルト：交響曲第40番 ト短調 K. 550

第1楽章 ソナタ形式。焦燥感に駆り立てられるような第1主題は、下行する短い旋律の断片を連ねることで形作られている。そうした下へ向かうメロディは楽章全体に張り巡らされており、第2主題も半音階の下行が基調になっている。そして展開部では転調を繰り返し、激しいドラマを生み出す。

第2楽章 ソナタ形式による緩徐楽章。第1楽章にはなかった穏やかで温かな雰囲気ではじまるのだが、時おり緊張感のある空気感が漂ってくる。

第3楽章 三部形式のメヌエット。激しく厳しい主部と、素朴な中間部が対比される。

第4楽章 ソナタ形式。フィナーレは激しい第1主題と、優しく語りかけてくれるような第2主題が劇的なコントラストを生み出している。展開部は、どこに飛ばされるのか予知できないような半音階で転調し、簡潔ながらも激しく心を揺さぶってくる。

[楽器編成]フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、弦楽5部。

■ モーツァルト：交響曲第41番 ハ長調 K. 551「ジュピター」

第1楽章 ソナタ形式。第1主題は、軍楽隊のような力強いリズムが先導。いかにも第2主題風にはじまる旋律が実は第1主題の変奏だということが少しあとに発覚するのが特徴。その後、改めて展開部でも活躍する本物の第2主題が登場する。

第2楽章 ソナタ形式による緩徐楽章。清廉な第1主題のあとに登場する、短調で悩ましいメロディは繋ぎとなる移行部。波打つ第2ヴァイオリンの伴奏の上で歌われるのが第2主題である。展開部は悩ましい旋律ではじまり、すぐに第1主題が再現されたかのように思えるが、これは偽物。展開部は続いており、本物の再現部は第2主題からはじまる。

第3楽章 三部形式によるメヌエット。冒頭に登場する半音階下行を含むメロディが、至るところで繰り返される。中間部(トリオ)では、最終楽章の冒頭にあらわれる主題が予告される。

第4楽章 終結部に5声のフーガが待ち受けるソナタ形式。提示部には合計6つのモチーフ(短い音型)を組み合わせて構成されている。展開部では第1主題と小結尾(コデッタ)の旋律が変奏されていく。最も重要なのは再現部のあとに控える終結部(コーダ)だ。6つのモチーフが2声、3声、4声、5声と徐々に折り重なってゆくことで5声のフーガが生まれ、金管とティンパニが加わるテュッティ(総奏)でクライマックスに到達する。唯一、フーガに絡まらなかったモチーフが回帰しながら締めくくられる。

この第4楽章の完成度があまりに高いため、モーツァルトの最高傑作と称されることも多い。ローマ神話の最高神ユピテル(ギリシア神話のゼウスに相当)の英語読み「ジュピター」と名付けたのは作曲者本人ではないが、本作がどれほど崇められてきたかが伝わる愛称である。

[楽器編成]フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部。



緑はつづく。想いはつづく。

GREEN KAJIMA

100年をつくる会社
in 鹿島



「GREEN KAJIMA」の詳細記事はこちら

Triphony Hall Series
Suntory Hall Series
2024-2025 Season

#659

11.16 [土]

トリフォニーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
トリフォニーホール・シリーズ 第659回定期演奏会
2024年11月16日(土)14時00分
すみだトリフォニーホール

11.18 [月]

サントリーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
サントリーホール・シリーズ 第659回定期演奏会
2024年11月18日(月)19時00分
サントリーホール

● ショスタコーヴィチ (1906-75)

交響曲第7番 八長調 op. 60「レニングラード」

約75分

Dmitry Shostakovich: Symphony No. 7 in C major, op. 60, "Leningrad"

- I. Allegretto
- II. Moderato (poco allegretto)
- III. Adagio
- IV. Allegro non troppo

※本公演は休憩がありません。

[指揮] 井上道義

Michiyoshi Inoue, Conductor

[コンサートマスター] 崔(チェ)文洙 / 伝田正秀

Munsu Choi and Masahide Denda, Concertmaster

[アシスタント・コンサートマスター] 立上 舞

Mai Tategami, Assistant Concertmaster

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

■共催：すみだトリフォニーホール [11/16公演]

■助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))

独立行政法人 日本芸術文化振興会

公益財団法人 ローム ミュージック ファンデーション

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

演奏会アンケートは
こちらから

<https://forms.gle/pGwSTF1gooyVLG9t8>



Rohm Music
Foundation
ローム ミュージック ファンデーション

Profile



©Yuriko Takagi

井上道義 [指揮] Michiyoshi Inoue, Conductor

1946年東京生まれ。桐朋学園大学で齋藤秀雄氏に師事。1971年グイド・カンテルリ指揮者コンクール優勝。ニュージーランド国立交響楽団・首席客演指揮者、新日本フィルハーモニー交響楽団・音楽監督、京都市交響楽団・音楽監督／第9代常任指揮者、オーケストラ・アンサンブル金沢・音楽監督、大阪フィルハーモニー交響楽団・首席指揮者を歴任し、斬新な企画と豊かな音楽性で一時代を切り拓いた。2007年には日露5つのオーケストラとともに「日露友好ショスタコーヴィチ交響曲全曲演奏プロジェクト」を行い、音楽・企画の両面で大きな成功を収めている。このプロジェクト以降、日本におけるショスタコーヴィチの演奏会は一気に増加しており、井上はその最大の功労者とも言われている。2014年4月 病に倒れるが、同年10月に復帰を遂げる。全国共同制作オペラ『フィガロの結婚』、大阪国際フェスティバル『バーンスタイン：ミサ』、全国共同制作オペラ『ドン・ジョヴァンニ』、『井上道義：A Way from Surrender ～降福からの道～』などをいずれも総監督として率い、既成概念にとらわれない唯一無二の舞台を作り上げてきた。2024年9～11月には、全国共同制作オペラ『ラ・ボエーム』が7箇所8公演(東京、宮城、京都、兵庫、熊本、石川、神奈川)にて開催中。2010年「平成22年京都市文化功労者」、社団法人企業メセナ協議会「音もてなし賞」、2016年「渡邊暁雄音楽基金・特別賞」、「東燃ゼネラル音楽賞」、2018年「大阪文化賞」「大阪文化祭賞」「音楽クリティック・クラブ賞」、2019年NHK交響楽団より「有馬賞」、2023年「第54回サントリー音楽賞」を受賞。現在、オーケストラ・アンサンブル金沢桂冠指揮者。

2024年12月30日に指揮活動を引退する。

Program Notes ●相場ひろ [音楽評論]

ドミトリ・ショスタコーヴィチ(1906~75)の交響曲第7番は、彼の作品中、西側諸国でもっとも初期から大人気を得た曲目のひとつであった。第二次世界大戦が1939年に勃発し、ヨーロッパがナチス・ドイツの脅威にさらされた時代、それに抗う国の代表としてソヴィエト連邦が注目され、かの国でもっとも知名度の高い作曲家であったショスタコーヴィチが、ドイツ軍に攻め入れられたレニングラード(現サンクトペテルブルク)の抗戦のありさまをスケール大きい叙事詩に仕立てたとして、この交響曲は、1942年3月5日に当時ソヴィエト連邦の臨時首都の役割を担っていたクイビシエフ(現サマーラ)で初演された時から西側の注目するところとなる。同年6月には英国で西側初演が行われ、翌7月には、初演権の激しい争奪戦の末、アルトゥーロ・トスカニーニ指揮NBC交響楽団がアメリカ初演(聴衆入りの放送初演)を行い、その模様は全世界にラジオ中継された。

1930年代にはスペイン内戦において、反共を旗印としたフランコ将軍側とソヴィエト連邦に後押しされた反ファシズム陣営の人民戦線とが激しく衝突した。このとき西側諸国には後者を応援する者が少なかった。スペインでは結局人民戦線の足並みの乱れに乗じてフランコが勝利し、その後70年代まで続く独裁政権を築くことになる訳だが、レニングラード攻防戦をその苦い経験に対するリベンジとみなしていた者も多かったことだろう。レニングラードを守るソ連軍は新たな反ファシズムの旗印となったのだった。

しかしながら、21世紀の私たちが知っている通り、ソヴィエト連邦内ではもうひとつ別のかたちの独裁が、ヨシフ・スターリンによって行われていた。レニングラード攻防戦は、現地で戦う者たちの志とは別に、そのスターリンを中心とするソ連政府のプロパガンダの材料でもあった。ショスタコーヴィチの交響曲第7番は公の機関によって「ファシズムに対するロシア民族の闘いと勝利」というストーリーにそって読み解かれ、その内容が作品よりも先に公開されて、作品のイメージを決定づけた。しかしながら、作曲者本人の思いは必ずしもそこにはなかったようだ。ショスタコーヴィチ没後の70年代後半から80年代にかけて、それまでさまざまなプロパガンダによって「共産体制が実現した理想の国」を演じていたソ連の実情が漏れ伝わるようになり、ショスタコーヴィチについても、公人としてプロパガンダに加担した彼の本音とされるものが、国外にも知られるようになった。交響曲第7番の作曲を終えたばかりの彼は、親しい友人たちに次のように明かしたそうだ。「ナチス・ドイツの国家社会主義はファシズムの一形態に過ぎな

い。この音楽はテロル、隷属、精神的束縛のすべての形態について語っているのだ。」つまり、この作品は直接にはレニングラード攻防戦について語っているかのように見えながら、その向こうにはソ連の独裁体制についての糾弾、さらにはおよそ独裁的な政治体制がもたらす領土と人心の荒廃という、普遍的な主題が隠されているのだ。

この交響曲が普遍的に、ファシズムがもたらす精神の隷属と、それに対する抵抗とを描くものであるならば、21世紀という混迷の時代において、この音楽は繰り返し聴かれ、新たな意味を読み解かれる必要があることだろう。

■ ショスタコーヴィチ：交響曲第7番 ハ長調 op. 60「レニングラード」

全15曲に及ぶドミトリ・ショスタコーヴィチの交響曲の中で最大の長さを誇る第7番 ハ長調 op. 60は1941年に作曲され、翌年3月にクイビシェフにて初演された。

1939年9月、ナチス・ドイツがポーランドへの侵攻を開始する。第二次世界大戦の端緒となったこの出来事の直後に、ソヴィエト連邦も侵攻を開始し、ポーランドは両国に分断して占領されることとなった。それに先立って両国は不可侵条約を結んでおり、お互いの領土には攻め入らないことを約束していたが、1941年6月、アドルフ・ヒトラーは第二次大戦とは異なる「イデオロギーの戦い」として不可侵条約を破棄し、ソ連領土へと侵攻する。ソ連首脳陣が首都モスクワからクイビシェフに避難したのは、奇襲によって勢いを得たドイツ軍がモスクワ近くにまで攻め入ったためである。

当時レニングラードはソヴィエト連邦第2の都市であり、軍事上の要衝でもあった。1941年7月、レニングラード占領を最優先の目標として攻め入る。同地ではドイツ軍が撤退するまでの約900日にわたって激しい攻防が続き、同市民のうち95万人がこの戦いによって命を落としたとまで言われる。ショスタコーヴィチは防空監視隊の一員として同地で第一線に立ちつつ、この交響曲の作曲を思い立ってスケッチを始めた。その後戦禍を避けてクイビシェフに移ってから作曲は続けられ、同年末には全国のスケッチを完成したという。曲は作曲者自身の「第七交響曲をファシズムに対する戦いと勝利、そして我が故郷レニングラードに捧げる」という発言から「レニングラード」という通称が付けられることとなった。

ショスタコーヴィチは当初、それぞれの楽章に「戦争」「回想」「祖国の

広野」「勝利」という副題を考えていたと言われるが、それらは完成稿から省かれている。

曲の構成と
音楽の特徴

第1楽章 アレグレット。三部形式とも、ショスタコーヴィチがさまざまに試みた変則的なソナタ形式の一例ともみなされる。冒頭に力強いユニゾンで演奏される第1主題は、レニングラード音楽院でショスタコーヴィチを教えたマクシミアン・シテインベルクによって「人間の主題」と呼ばれた。第2主題はヴァイオリンに始まる歌謡的なもので、「平和な生活の主題」とも言われ、第1主題と鮮やかな対比を成す。ソナタ形式の展開部にあたる部分はどちらの主題とも関連なく、まったく新しいエピソードが始まる。間断なく刻まれる小太鼓のリズムに乗って、最弱奏で主題（「戦争の主題」と呼ばれる）が歌い始められ、それが奏法や楽器法を替えつつひたすらに繰り返されていきながら大きなクレシェンドを描くこの部分には、モーリス・ラヴェル(1875~1937)の「ボレロ」やカール・ニールセン(1865~1931)の交響曲第5番 op. 50の影響があると言われる。次第に迫力を増した音響が頂点に達した後、小太鼓が途切れると、ソナタ形式の再現部にあたる部分に入る。コーダは「戦争の主題」と小太鼓のリズムが顔を出し、不穏な先行きを予感させつつ曲を閉じる。

第2楽章 モデラート(ポーコ・アレグレット)。スケルツォにあたる楽章で、作曲者は「楽しい出来事や、人生の喜びを、穏やかな悲哀が靄のように包みこんでいる」と述べている。中間部ではショスタコーヴィチらしい、苛烈でアイロニカルな音楽が繰り広げられる。

第3楽章 アダージョ。主部は壮麗なコラールで幕を開け、民俗的な薫りの立ちこめる音楽が繰り広げられる。中間部は執拗なりズム音形の上を音楽が疾走し、激しく高揚していく。主部が回帰し、余韻を残しながら切れ目なく次の楽章に続く。

第4楽章 アレグロ・ノン・トロポ。弱奏による序奏を経て主部に入ると、特徴的なリズムを持つ中心主題が弦楽器のユニゾンによって奏される。次第にアグレッシヴに高揚していくが、やがて音楽はテンポを落とし、峻厳な葬送行進曲調を帯びる。行進曲が沈静すると、音楽は序奏の素材を用いながら、長大なクレシェンドを描きつつクライマックスへと到達する。

[楽器編成]フルート3(アルトフルート、ピッコロ持替)、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット3(E♭管クラリネット持替)、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、[パンダ:ホルン4、トランペット3、トロンボーン3]、ティンパニ、トライアングル、タンバリン、小太鼓、大太鼓、シンバル、タムタム、シロフォン、ハーブ2、ピアノ、弦楽5部。

背景～独ソ戦の状況 ▶

レニングラード包囲を
目の当たりにして ▶



SHARE LOUNGE

発想が生まれ、シェアする場所

シェアラウンジは、ラウンジの居心地と本による提案、オフィスの機能性を兼ね備え、訪れた人に「新しい発想を提供する場所」です。

新たな発想は心を躍らせ、生活を明るくし、世界をほんの少し良い場所にしてくれるもの。働く人だけでなく、お子さまや学生、主婦の方など、すべての人たちが日々の暮らしの中で、発想を必要としています。

ここに集まる多様な人々が風景をつくり、そこにいるだけで刺激がもらえたり、本からインスピレーションを得ることもできる。ある時は居心地の良いカフェやバーとして、またある時は体験を促すイベントスペースとして。

新たな発想を生む、たくさんの仕掛けが詰まった空間です。

SHARE LOUNGE by Culture Convenience Club

[SHARE LOUNGE]

代官山 蔦屋書店／丸の内／Olive LOUNGE 渋谷／渋谷サクラステージほか、全国に順次拡大中。最新の店舗一覧はアプリをご覧ください。



SHARE LOUNGE
公式アプリ

App
Store



Google
Play



SUMIDA
TOBIRA of classic
2024-2025 Season
#27

11.29 [金] 30 [土]

すみだクラシックへの扉

新日本フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会 すみだクラシックへの扉 第27回

2024年11月29日(金)14時00分 すみだトリフォニーホール

11月30日(土)14時00分 すみだトリフォニーホール

● J. S. バッハ (1685-1750)

2つのヴァイオリンのための協奏曲 二短調 BWV 1043 *.**

約20分

Johann Sebastian Bach: Concerto for Two Violins in D minor, BWV 1043 *.**

- I. Vivace
- II. Largo ma non tanto
- III. Allegro

● メンデルスゾーン (1809-47)

ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 op.64 **

約30分

Felix Mendelssohn Bartholdy: Violin Concerto in E minor, op. 64 **

- I. Allegro molto appassionato
- II. Andante
- III. Allegretto non troppo – Allegro molto vivace

—— 休憩20分 ——

● ベートーヴェン (1770-1827)

交響曲第7番 イ長調 op.92

約40分

Ludwig van Beethoven: Symphony No. 7 in A major, op. 92

- I. Poco sostenuto – Vivace
- II. Allegretto
- III. Presto
- IV. Allegro con brio

[指揮・ヴァイオリン] ジュリアン・ラクリン *

Julian Rachlin, Conductor / Violin *

[ヴァイオリン] 三浦文彰 **

Fumiaki Miura, Violin **

[コンサートマスター] 西江辰郎
Tatsuo Nishie, Concertmaster

[アシスタント・コンサートマスター] 立上 舞
Mai Tategami, Assistant Concertmaster

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

■共催：すみだトリフォニーホール

■特別協賛：オリックス株式会社／公益財団法人オリックス宮内財団

■助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))
独立行政法人 日本芸術文化振興会

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。



オリックス株式会社
公益財団法人 オリックス宮内財団



Profile



ジュリアン・ラクリン [指揮・ヴァイオリン]

Julian Rachlin, Conductor / Violin

エルサレム交響楽団音楽監督(イスラエル)、クリスチャンサン交響楽団(ノルウェー)首席指揮者、トゥルク・フィルハーモニー管弦楽団(フィンランド)首席客演指揮者、ロイヤル・ノーザン・シンフォニア(英国)首席アーティスティックパートナー。指揮、ヴァイオリン、ヴィオラ、室内楽および教育分野で活躍し、99年よりウィーン市立音楽芸術大学ヴァイオリン科教授。シカゴ響、イスラエル・フィル、バーミンガム市響、ウィーン響、ウィーン放送響、オスロ・フィル、コンツェルトハウス・ベルリンなどを指揮。ヴァイオリニストとして、マケラ指揮オスロ・フィル、メータ指揮ロサンゼルス・フィル、テミルカーノフ指揮サンクトペテルブルク・フィル、オロスコ=エストラーダ指揮バイエルン放送響、ホーネック指揮ピッツパーグ響、ミュンヘン・フィルなど、世界の著名指揮者および楽団と共演する。ソニー・クラシカル、ワーナー・クラシック、ドイツ・グラモフォンからCDを多数リリース。ユニセフのグッドウィル・アンバサダー。1974年リトアニア生まれ。



©Yuji Hori

三浦文彰 [ヴァイオリン] Fumiaki Miura, Violin

2009年世界最難関と言われるハノーファー国際コンクールにおいて、史上最年少の16歳で優勝。18年にサントリーホールARKクラシックスのアーティスティック・リーダー、24年に宮崎国際音楽祭の音楽監督に就任。ロサンゼルス・フィル、イスラエル・フィル、マリンスキー劇場管、ベルリン・ドイツ響、バルセロナ響、エーテボリ響などと共演。共演した指揮者には、ドゥダメル、ゲルギエフ、フェドセーエフ、ズーカーマンなどが挙げられる。国内では、大河ドラマ「真田丸」テーマ音楽を演奏したことや「情熱大陸」への出演も大きな話題になった。近年は指揮活動も始め、アリカンテ響、東京フィル、京響、広響、ARKフィルなどを指揮。25年にはフィルハーモニア管、バンベルク響との共演を予定。CDはエイベックスよりリリース。09年度第20回出光音楽賞受賞。22年「Forbes」Asiaにおいて「30 under 30(世界を変える30歳未満の30人)」に選出される。使用楽器は株式会社クリスコ(志村晶代表取締役)から貸与された1732年製グアルネリ・デル・ジェス「カストン」。

Program Notes ●石川亮子 [音楽学]

ト音記号はドイツ語で、Violinschlüssel(ヴァイオリン記号)とも呼ばれる。ヴァイオリンはアラブから中世ヨーロッパに伝えられたとされ、16世紀以降、とりわけ北イタリア・クレモナの名工たち(グアルネーリ、ストラディヴァリの名前を聞いたことがある人も多いだろう)の活躍によって、イタリア・バロックの頂点に君臨する楽器となった。楽器の全長は約60センチ。弓でこすることで弦が振動し、駒や魂柱を通じて本体全体が共鳴箱となって、張りのある豊かな音が生み出される。タルティーニは「悪魔のトリル」を書き、パガニーニは「悪魔に魂を売った」とさえ言われた。その高音の輝かしい音色は、時には悪魔と結びつくほどに、時を超えて人々を魅了し続けている。

■ J. S. バッハ: 2つのヴァイオリンのための協奏曲 二短調 BWV 1043

作曲時期と経緯 ▶ ヨハン・ゼバスティアン・バッハ(1685~1750)の多くの器楽作品は、レオポルト公の宮廷楽長を務めていたケーテン時代(1717~23年)に作曲されたと考えられてきた。一方、本作には、1730年頃のバッハ自身によるパート譜が残されており、ライプツィヒ時代(1723~50年)、バッハが1729年に指揮者に就任した、コレギウム・ムジクム(音楽愛好家や学生たちのグループ)の活動のなかで演奏されたことが示唆される。とは言え、このために作曲されたのか、それともケーテン時代のものが書き直された(あるいはアレンジし直された)のかについては、様々に意見が分かれるところである。

曲の構成と音楽の特徴 ▶

高名なオルガニストとして知られたバッハであったが、1703年から務めたワイマール宮廷楽団では、ヴァイオリンやヴィオラを演奏していた。曲は急・緩・急の3楽章構成で、2つのヴァイオリンは常にフーガ風に、またカノン風に模倣し合いながら、全体として精緻なポリフォニーを織りなしている。第1楽章はヴィヴァルディ風のリトルネッロ形式、すなわちトゥッティの部分とソリ(2つのヴァイオリン)の部分が交代しながら進む。へ長調、8分の12拍子によるシチリアーノ風の第2楽章は、バッハのなかでも格別に美しい緩徐楽章として名高い。第3楽章も第1楽章と同じ原理によりながら、さらに細かいパッセージや重音を響かせること等によって、よりエキサイティングな音楽となっている。

[楽器編成] ヴァイオリン独奏2、チェンバロ、弦楽5部。

■ メンデルスゾーン：ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 op. 64

ロマン派の息吹あふれる
名作の誕生

ベルリオーズやショパンとともに、19世紀前半を代表する作曲家フェリックス・メンデルスゾーン(1809~47)。同世代のシューマンから「19世紀のモーツァルト」と称されたメンデルスゾーンは、ロマン派の息吹あふれる名曲の数々は勿論のこと、指揮者としても、1829年にバッハの「マタイ受難曲」を復活上演する等、数多くの功績を残した。「メンコン」の愛称で呼ばれる本作もまた、1838年夏、当時ライブツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の指揮者であったメンデルスゾーンが、コンサートマスターを務める名手フェルディナント・ダーヴィトのために、ヴァイオリン協奏曲を献呈しようと作曲が開始されている。

6年の歳月を経て

一度聴いたら誰もが忘れられない、冒頭のしなやかに流れ出るようなヴァイオリン独奏の旋律。しかしながら残された手紙やスケッチ等からは、メンデルスゾーンが悩みつつダーヴィトと相談しながら協奏曲を書き進めたことが推察され、完成には6年の歳月を要した。初演は1845年3月13日、ダーヴィトの独奏、ゲヴァントハウス管弦楽団の演奏会にて。この時メンデルスゾーンは多忙と体調不良で出席さえできず、指揮は副指揮者のゲーゼによって行われた。

曲の構成と
音楽の特徴

独奏パートに関してはダーヴィトの助言が大きく、彼らの共同制作と言ってよいだろう。曲は急・緩・急の伝統的な3楽章からなるが、楽章は休みなく続けて演奏される。第1楽章は情熱と気品にあふれた音楽。コラル風の第2主題は木管楽器によって提示され、ソリストの腕の見せ所であるカデンツァが展開部の後に置かれる等、新たな試みも随所にみられる。ホ短調からハ長調へと転調すると、第2楽章は静かで美しい歌の世界。第3楽章はホ短調の序奏から始まり、テンポ・アップしてホ長調による主部に入る。ヴァイオリン独奏による軽快な第1主題と、オーケストラによる躍動的な第2主題。展開部には新たな主題も顔を出しながら、最後のコーダまで鮮やかに駆け抜けていく。

[楽器編成] ヴァイオリン独奏、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部。

■ ベートーヴェン：交響曲第7番 イ長調 op. 92

中期の充実作

番号付けされたもので9曲を数える、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)の交響曲。そのうち1804年に書き上げられ、規

模の上でも内容の上でも圧倒的に充実した第3番「英雄」をもって、交響曲の新たな歴史が始まったと考えるのは、音楽史における一致した見解であろう。ロマン・ロランは「英雄」以降の約10年間に生み出された作品群を「傑作の森」と呼んだが、その「英雄的様式」による中期は、交響曲で言えば第8番まで続くことになる。

空白の3年ののちに

交響曲第7番は第5番「運命」と第6番「田園」から丸3年を経た、1811年秋に本格的に着手されている。その間、ナポレオン戦争や失恋等の痛手もあり、ベートーヴェンは1811年夏にボヘミアの温泉保養地テープリッツを訪れて、あたたかきもてなしに大いに慰められたと伝えられる。再び創作意欲を取り戻したベートーヴェンは、第7番、続いて翌年夏も同地に滞在して第8番の作曲を進めていき、最終的に第7番は1813年初めに完成された。

全体を統一する
リズム動機

「運命」と「田園」がそうであるように、同時期に同じコンセプトから、対照的な表情を持つ2つの作品を作曲するのは、ベートーヴェンの創作スタイルの特徴のひとつと言える。第7番と第8番をペアとして、「イ長調の大交響曲(私の最も優れた作品のひとつ)」と「より小規模なハ長調交響曲」と語ったのは、ベートーヴェン自身であった。それとともに両作品には、リズムが全体を統一する要素となっていること、純粋な意味での緩徐楽章を持たないこと等、少なからぬアイデアを共有しているのが確認できる。とりわけ第7番は、ワーグナーによって「舞踏の聖化」と称賛されたように、各楽章がそれぞれの「リズム動機」を持つことで、人々の心を浮き立たせるような音楽が実現されている。

曲の構成と
音楽の特徴

第1楽章は堂々とした序奏によって幕を開ける。やがて主役となる「リズム動機」が登場し、ソナタ形式による主部となるが、第1主題と第2主題の対比はあまりなく推進力をもって展開されていく。第2楽章は慣習的な緩徐楽章ではなく、「アレグレット(やや速く)」と記されている。葬送行進曲を思わせる音楽で、中間部は抒情的な美しさをたたえる。第3楽章は内容的にはスケルツォに相当する。形式としてはロンドと言え、間にはのどかな田舎の風景を思わせるトリオが挟まれる。第4楽章はベートーヴェンの代名詞である、「アレグロ・コン・プリオ(生気に満ちて速く)」のフィナーレ。再び明るく喜ばしいリズムの饗宴となり、最後のコーダでもエネルギーを持続させながら、熱狂的に締めくくられる。

[楽器編成] フルード2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部。